

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「あなたに寄り添う言葉のチカラ」 特別支援教育研究 2025 No. 819.11

学校法人立花学園立花高等学校長 齋藤 眞人先生

私は音楽科の教員です。中高時代音楽だけが私の生き甲斐で、他の勉強はからっきしダメでした。当然成績も振るわず、将来に対しての展望も描けない苦しい日々がありました。

そんな時に、担任の先生が「お前には音楽がある」と声をかけて下さったのです。音楽しかないと思い込んでいた私にとって「音楽がある」という声かけは、本当に力強く響きました。以降の私の人生は、音楽のおかげで広く強く切り拓かれて、今に至ることができたのでした。あの時に、あれもこれも求められていたら、私には音楽すらなくなっていたかもしれません。私は、私にあるものを無条件に認めて下さった恩師の一言に救われたのです。



先日の出来事です。海外で山岳救助隊犬として活躍する大型犬が、近くのショッピングモールに飼い主さんと一緒に来ていました。あまりの大きさに、異様な空気が周辺を包んでいました。

そこに近づいてきたのが、本校の卒業生です。彼の特性で最も目につくのが「空気を読まない」とされる一連の言動です。案の定この日も、空気を読んで遠巻きに見守る方々を一切気にすることなくそのワンちゃんのもとに歩み寄り、いきなり「おすわり！」と叫んだのです。そのワンちゃんは、サイズからは想像もつかないほど甘えん坊で、彼の一言に大喜び！するとそれを合図に遠巻きに見ていた方々が一気に近寄ってきて和やかな雰囲気が一変しました。空気を読まない彼が、空気を読んでいた方々を動かしたのです。

音楽以外が苦手でも、空気が読めなくても、それをネガティブに語るのではなく、ありのままを受け容れる寛容さが社会に広がればどんなに素晴らしいだろうと、そんな夢を描いています。みんなと一緒にであろうが、異なっていようが、そのままだが一番ステキです。



・人と違うことは悪いことではない。欠点でもない。その人らしさであり、意味がある。特別支援教育や障害理解教育を園や学校の真ん中に位置付け、互いの違いを認め合い、支え合う学級づくりを目指そう。「赤い花は赤く咲け、白い花は白く咲け」、ありのままに生きる姿は何よりも美しい。自然に、素直に、生き生きと！



とれたて直送便



「高等学校学校生活サポート事業（高校教育課）」

特別な教育的支援を必要とする子どものために、幼保には加配の先生、小・中学校には特別支援教育支援員が配置されています。高等学校では、「高等学校学校生活サポート事業」の一環として、県全体で6校に6名の学習支援サポーターを配置しています。県北地区は3名で、うち1名が能代高等学校定時制課程二ツ井キャンパスに配置されています。国語、数学、英語等のいわゆる座学の授業はもとより、体育の実技や家庭の実習、情報のタイピング補助等、サポートの種類は多岐にわたっています。

なお、県では特別な支援を必要とする生徒の教育的ニーズに応えるために、教育、医療、福祉、労働関係者による「高等学校特別支援チーム」を設置し、相談・支援活動や研修会等を通じて、具体的なアドバイスや計画作成の支援を行っています。